HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ア・エヌ・エンゲリガルトについて
Author(s)	山本, 敏; Yamamoto, Satoshi
Citation	スラヴ研究, 6, 27-41
Issue Date	1962
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4960
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113168.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

エンゲリガルトについて

山　本　　敏

1

ロシヤが封建制から資本制に移行する過程で，いかにして資本主義に対処すべきかについて，周知のごとく，多くの論争が行なわれてきた．その中にあって，自ら23年間の所領経営の経験に基ずく，農業と農村についての詳細な実態報告を通じて，国の進路について発言しつづけたア・エヌ・エンゲリガルトの存在は，従来いささか顧りみられることが少なすぎたように思われる．それは，一つにはロシヤの各産業部門が新らしい資本主義体制にいかに適応してきたか，いかにその生産力を上昇させてきたかを明らかにせんとする幾つかの試みの中で，中小地主についての具体例がほとんどなく，しかも利用する原史料そのものがアンケート調査などであって，充分に信頼できるものがきわめて少ないという状態の中で，かれの十二の書簡の意義がぬきがたく大きいと思われるからである．

さらに，私にとって興味あるのは，いわゆる「遺産」をつくりきずき上げてきた道程には，少なくとも絶えずその周辺に，存続150年間の自由経済協会が存在したことである．ア・イ・メンデレーエフ，ヴェ・ヴェ・ドクチャーエフらとともに，ここにとりあげるエンゲリガルトもまた自由経済協会のメンバーの一人であったことにも，あるいは，自由経済協会がかれらに活躍の場を与えてきたことにも，「遺産」を考える場合の一つの手がかりを求めることができるのではなかろうか．だが，残念なことに，このことに視角の中心をおいて論議をすすめるためには，手許の資料はいかにも不充分である*．ここでは，この流れの周辺にあった，あるいはその中心にあった一人の篤実な化学者であり，実践家たるエンゲリガルトの在り方をのべて，「遺産」を基底にしたロシヤの道を考察する場合の一助にしたいと思う．

メンデレーエフらと同じく，自然科学者であり，また実際家であったかれの活動は，本来ロシヤの科学史，文化史の上で論ぜらるべきであろう．たとえば，レウェリは，60～70年代のロシヤの経済思想を叙述するに際して**，単に人名註の中で，かれが「ナロードニキにして，社会評論家，農学者，農芸化学の専門家であり，12の書簡を＜オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ＞誌上に掲載した」という数行をさいているにすぎない．また，当代第一級の経済思想史家をもって任ぜられているツァゴロフにしても，まったく同様である***．もっとも，これには，レウエリやツァゴロフのこれらの書物

---

* Орешкин В. В., Вольное экономическое общество в России (1765-1917гг.) Инст. экономики Изд. АН СССР. 1962 はその点で期待をもたれる．

** А. Л. Реуэль : Русская экономическая мысль 60-70-х годов XIX века и марксизм. Госполитизд. 1956

*** Н. А. Цаголов : Очерки русской экономической мысли периода падения крепостного права. Госполитизд. 1956

が出たとき，つまり，1956年の当時までのソヴェトにおけるナロードニキの取り扱い方を勘案しないわけにはいかない．別言すれば，ナロードニキであるかないかということに，あまりに多くの比重がおかれすぎていたと思われるのである．また，たしかにレーニンによってかれはナロードニキと呼ばれているが，エンゲリガルトをナロードニキとして取り扱うべきか否かについては，若干の問題が残される*.

エンゲリガルトの活動の時期は，借り物でないロシヤの農学がその基礎をきずいた時期（そのあまりにも遅いことにわれわれは一驚せざるを得ない）と一致する．この時期は，ペ・ア・コストィチェフ，イ・ア・ステブウト，ア・ヴェ・スヴェトーフ，デ・イ・メンデレーエフ，カ・ア・チミリャーゼフ，ヴェ・ヴェ・ドクチャーエフ等々のすぐれた学者たちの名前と切離して考えられないが，その中にあってわがエンゲリガルトの名前は，単に研究室にとどまらず，所領経営の実践家であった点にとくに注目しなければならない．

最近になって，エヌ・カ・カラターエフ教授をはじめとする科学アカデミー経済研究所の手になる「ロシヤ経済思想史」では，カ・テ・プリツィナ氏がかれのために一章を割いた．

2

まずかれの生涯を略述する．生まれは1832年，スモレンスク県ドウホヴシチナ郡であるが，生家の職業は詳かでない．ただ，地主であったことに間違いはない．15歳まで家庭教育をうけ，その後ミハイロフスコィエ砲術学校に入学，1853年に卒業した．つまり，かれは元来鋳砲術をもって身を立てるべく教育されたのである．ペテルブルグの兵器廠に入り，1年半後には鋳造職長となった．1954年には「砲術雑誌」に論文をのせている．

同時にかれは自分の家に化学実験室を設け，そこでの成果を1855年の科学アカデミー紀要に発表した．1857年には，化学者エヌ・エヌ・ソコロフとともにロシヤで最初の公開実験室をつくり，1859年になると，「ソコロフとエンゲリガルトの化学雑誌」を発刊，これにはメンデレーェフをはじめ，エヌ・エヌ・ベケートフ，ア・エム・ブトレローフなどが論文を寄せた．この雑誌は，1861年の秋，学生の騒ぎに参加したかどでエンゲリガルトが逮捕されるにおよび休刊となった．拘置3カ月の後，かれはまた兵器廠に戻った．

1864年，兵器廠の勤めをやめることなく，ペテルブルグ農科大学の講義をもっことになった．1866年，ついに兵器廠をやめる許可を得て，農科大学の専任となった．それから約5年間，化学教授としての生活が続くのであるが，その間にかれの周辺にいたのは，化学者のペ・ア・ラチノーフ，エム・ゲ・クチェロフ，土壌学者ペ・ア・コストィチェフ，後の農業大臣ア・エス・エルモローフらである．ここでかれは，後に農科大学

* ルサーノフは，かれが「土地と自由」の秘密組織に参加していると書いている（Н. Е. Кудрин (Русанов), Н. Г. Чернышевский и Россия 60-х годов, 1905 «Русское богатство» № 3, стр. 169）が，М. К. Лемке のゲルツェン全集への註によると「土地と自由」の活動家の一人ア・ア・スレプツォフは断乎としてそれを否定している．

の誇りとなった立派な化学実験室をつくり，この実験室は広く一般の研究者たちに公開された．

この時期のかれの主研究は，当時イギリスおよびドイツてすでに広く用いられた燐酸肥料についてである．リーヴィッヒによる化学肥料研究の成果は，ロシヤではようやくこの時期になって，問題として本格的に取り組まれたのである．この場合，もちろん，メンデレーエフ，チミリャーゼフをはじめ，イ・ア・ステブウト，ペ・ア・イリェンコフ，ア・ペ・ルュドゴフスキーらの研究活動を考えないわけにはいかない．ともあれ，鉱物肥料の利用が，改良された機械，器具を用いるのと同じく，改革後の諸条件の下で，何らかの社会的な改革によらず農業生産を高める根本的な手段方途であると見ていた一群の人々のあったことは確かである．上述の学者たちの志向は，単にロシヤの科学的な立ちおくれを取り戻さんとするだけのものでは決してなかった．

1866年，農業および農村工業局の委托により，かれはスモレンスク，クールスク，オルロフ，ヴォロネージ，タンボフの諸県において燐鉱層の調査に当たるなど，かれの飽くなき燐酸の研究は，燐酸肥料についての世の関心をいよいよかき立てた．

かれは農科大学における講義のほかに，農業博物館における公開講義を受持った．この講義は「オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ」誌に掲載され，後に単行本＊となった．

1867年から1868年にかけての第一回ロシヤ自然科学者大会に積極的に参加し，ロシヤ化学会の設立を計画し，ロシヤ物理化学会の有力なメンバーとなった．1869—70年に公刊された「同質異性クレゾールとニトロ化合物について」に対し，ペテルブルグ科学アカデミーからロモノーソフ賞を受をうけ，また1870年ハリコフ大学から博士号を授与された．

1854年から1870年までの間に，約50におよぶ化学関係の論文を書いている．注目すべきは，ダーウィンの「種の起源」がロシヤ訳されると，かれが直ちにこれを紹介していることである．この点かれは，チミリャーゼフとともに，ロシヤにおける最初のダーヴィニズムの宣伝者である．

以上，大学をやめるまでのかれの，化学者としての活動を述べたが，経済思想史の上でかれを論ずるに際しては，いささか詳細にすぎるかも知れない．この間，1863年まだ兵器廠にいたころ，スモレンスク県ベリスキー郡で4カ月をすごし，1861年の改革が農業の発展に対していかなる影響を与たかをつぶさに観察する機会を得た．この時の観察記は，ア・ブウグリムという匿名で，4つの書簡の形とし「サンクト・ペテルブルグスキエ・ヴェドモスチ」に掲載した．これはかれの最初の社会評論的文筆活動となった．

1870年，すでに大学の学部長になっていたが，学生の夜の集会に出て，反政府的な演説をしたということで逮捕され，首都および大学所在の都市から追放された**．そこでかれは，スモレンスク県ダラゴブウジスキー郡にあるバティシチェヴォの自分の所領に移り，かれの経営時代がこの時からはじまるのである．

---

* Химические основы земледелия, 1878

** その事情については，1911年度の＜イストリーチエスキー・ヴェストニク＞にのった H. A. Энгельгардт, Давние эпизоды に詳しい．

以前から社会詳論家としてのエンゲリガルを高く詳価していたサルティコフ・シチェドリンは，かれがペテルブルグへ戻るよう請願したり，文筆活動をするためあらゆる援助を惜しまなかった．しかし，かれのこの個人的な不幸は，むしろロシヤの農学にとっての幸いであったというべきであろう．

1871年から1893年にその生涯を終えるまで，かれは専ら農業の分野で活動し，約50におよぶ論文を書いたが，それらは主として燐酸肥料の使用と非黒土地帯に合理的な農業方式をつくり出すことに関するものである．この間，「農業新聞」その他農業関係の雑誌に掲載されたかれの論文は，後になって一冊の本にまとめられた*.

またかれは，1872年から，「オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ」誌に「農村からの簡書」を送稿しはじめる．これは1882年まで11年間続けられた．最後の，つまり第12番目の書簡は，1884年に「オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ」誌が廃刊となったので，おくれて1887年に「ヴェストニク・エヴロプィ」誌に掲載された．

シチェドリンはエンゲリガルトに宛てた手紙の中で，これらの書簡を絶えず称揚していたが，ア・イ・ボグダノヴィチらによってもこの書簡の意義が宣伝された．レーニンもまた，1897年に書いた論文「われわれはいかなる遺産を拒否するか？」の中でこの書簡を取り扱かい，また「ロシヤにおける資本主義の発展」では，エンゲリガルトの経営について一項を設けた．

書簡集は，1882年以来数版を重ねているが，ここで私が用いたのは第6版*であり，本稿の中で用いた頁数は，すべてこのテクストのものである．

*　　*　　*

さて，バティシチェヴォでのかれの経営の実態はどうであったか．

かれがやってきた1871年ごろ，ここには約560㌶あったが，そのうち既耕地は80㌶にすぎなかった．用益地を種類別に分類すると次のようになる．(463頁)

1) 古くから耕してきた土地．穀物の播種適地で，耕作してあるところ．これは全領域のごくわずかの部分でしかない．

2) 放置して雑草だらけになった畑．<法令>の後，農民のところから切り取った畑地で，地主所領の中に放置されていたところ．このように放置されて，正しく耕作されていない土地の量は，恐らく，古くから耕やされている土地の二倍以上にもなろう．

3) 河，小川，谷間にある草地，農民分与地にある低地．

4) 地主の荒地，農民分支地からの「切取地」．この種の用益地が優勢であり，大変な面積を占めている．荒地を除いて，いかなる草刈地もないような場所がある．そこでは何よりも飼料，堆肥の不足に悩まされ，私のやり方が一番適用されたのはそのような場所である．

5) 木材伐出用の場所．大部分は無駄に放置され，荒れた放牧地にもなっていない．

---

* О хозяйстве в северной России и применение в нем фосфоритов, 1888 および Фосфориты и сидерация, 1891. 前者には Из истории моего хозяйства 1876-78 という一文が含まれていたし，後者には，В. В. Докучаев の援けを得て1890年にかかれた土壌学の意義についての論文が含まれている．Л. Л. Балатев, В. В. Докучаев и А. Н. Энгельгардт. Журн. <Почвоведение> № 5, 1956

**А. Н. Энгельгардт, Из деревни—12 писем. 1872～1887. 1960, М. Изд. Сельхозлит. これには Л. Л. Бапашев 教授の序論が付されている．

6) 森林，多少とも役に立つところは伐出され，荒らされて駄目になっている．

畜産はといえば，「堆肥用」の家畜があったにすぎない．既耕地80㌶は三圃制で，ライ麦と燕麦が播種されていた．つまり，バティシチェヴォそのものが，1861年以後その所有者によって放置された所領の典型的なものであった．

1872年，森林をひらいて草刈り用にしていた新墾地やしばらく放置していた場所にあまを播種し，クローバーとあまを入れた15年輪作をはじた．全体耕地に緑肥を入れ，1885年からは鉱物肥料を使用しはじめた．秋播ライ麦と燕麦の収穫率は倍化し，しかもきわめて高度の耐久性をもつに到った．書簡の中に次のような数字がある（115頁）．

作付作物	1871年	1872年
ライ麦	110クーリ	202クーリ
燕麦	145クーリ	265クーリ
大麦	13クーリ	38クーリ
小麦	なし	19クーリ
あまに	6クーリ	18クーリ
あま	34プード	128プード

1893年を迎えるまでには，バテッシチェヴォの既耕地も，120㌶を数えるにいたった．この間のかれの輪作は次のようなものである（457頁）．1）休閑 2）ライ麦 3）春播作物 4）休閑 5）ライ麦 6）春播作物 7）休閑 8）ライ麦 9）牧草（あわがえり混播のクローバー） 10）牧草 11）牧草 12）牧草 13）牧草 14）牧草（はじめのうちは刈取用，後には放牧用） 15）あま

元々何一つ農業教育をうけなかったかれが，このようにして輝やかしい経営上の成果をあげるに到ったのは，誠実なかれの人柄によってのみ説明しつくされるものではない．

このような経営の成功と，主としての「書簡」集によってでき上がった農業問題評論家としてのかれの声名とによって，バティシチェヴォには多くの青年学徒たちが集まった．バティシチェヴォは，農業経営を研究し，あるいは，農民の打ちひしがれた状態を救うために道を求めんとする青年知識人たちの学校となった．1877年から1884年にかけて，バティシチェヴォでは約80人が働らいていた．この人々の中に，バティシチェヴォ，北カフカーズその他のところに，青年知識人のアルテリをつくろうとする運動が起こり，バティシチェヴォの近くに三つのインテリゲンツィア村をつくった．しかし，その成果ははかばかしからず，1884年にはついにその最後のものも解散してしまった．

このことによって，かれが「知識人の農民」にかけた夢は打ちやぶられ，それ以来，かれの関心は専ら施肥試験に向けられた．

とくに重要な意義をもっていたのは，かれの燐酸施肥試験である．1885年，スモレンスク県のロスラーブリスキー，ブリヤンスキー両郡で，ライ麦に燐酸施肥試験を行ない「奇蹟」といわれるほどの成果を挙げた．ドクチャーエフ，ベルナドスキー，コストイチェフらも，かれの試験成績に非常な関心を払い，一再ならずバティシチェヴォを訪れ

た．90年代に入ると，農業省がかれの実験に協力し，試験圃場は種々の作物や牧草地にもおよび，石膏，カィニット石（加里）その他の肥料が用いられるようになって，バティシチェヴォはロシヤにおける第一級の農学実験所となった．

これより先，1867年から69年にかけて，ア・ペ・リュドゴフスキーの主唱により，メンデレーエフの指導のもとに，ロシヤで最初の鉱物肥料の実験が自由経済協会の下で行なわれた．実験は，ペテルブルグ，スモレンスク，モスクワ，シンビルスクの諸県において，燕麦と秋播ライ麦について行なわれたが，気象条件が悪く，必らずしも成功的な結果は得られなかった．メンデレーエフは，この結果を見て次のように結論した．すなわち，「わが国では土地が粗いので，熟畑化する必要がある．わが国では堆肥を施すこと，よく耕起すること，石灰分をやることが必要なのであって，燐酸を必要としない」というのである．メンデレーエフのこの結論は，70年代，80年代における鉱物肥料に対する関心の在り方に大きく影響した．エンゲリガルトはそれに反論して，痩せた，堆肥をやってない土地で，燐酸がとくに大きな効果のあることを示した．バティシチェヴォでは，ライ麦の収穫が1㌶につき4ツェントネルから8ツェントネルに増大したのである．かれのこの成果により，80年代の終わりには，コストロマー，リャザンその他諸県に幾つかの燐酸工場ができ，1894年には80万プードの燐酸肥料を製造していた．

燐酸肥料についてのかれの研究は，引き続きその弟子たちによって十月革命に到るまで続けられた．自由経済協会は，かれの業績を賞して，その名誉会員とした．かれの死後「エンゲリガルト農業実験所」がつくられ，バティシチェヴォは農業省のものとなった．

3

さて，12の書簡集「農村から」は，終始して農民の言葉を用いて綴られている．取り扱った主題は，バティシチェヴォでのかれの経営資料，あまおよびクローバーの栽培と施肥の成績からはじめて，農民の生活，農村における婦人の状態，農民経営の収支，農村の獣医の記述等々におよんでいる．また，スモレンスクの官製農業博覧会を揶揄したり，「ルーシ」の編集者であり，著名なスラヴ主義であったアクサコフと，農民経営向上のための方策について論争するなどしている．

とくに後の方の書簡の中から汲みとられることは，バティシチェヴォでの経営がかれを満足させたのは技術的な面においてだけであり，直面する資本制の社会的，経済的条件の中で，その輝やかしい外面的な経営の成功にもかかわらず，経営主としての自分の在り方に絶えず苦しんでいたということである．とくに，1894年にかけて，インテリゲンツィア村の計画が次々と失敗に終わると，この悩みはいよいよ拭い難いものとなったが，そのときかれは，借り物ならぬロシヤ農学の確立を目ざす強烈な志向の中にそれを解消させ，専ら施肥試験に集中するのである．

書簡の中でかれは，改革後の農村の生活を深く考察し，幾多の事実資料にもとずいて次のように指摘した．すなわち，農業が従前どおりに立ちおくれたままであり，農民層が繰り返えして飢饉に遭い，貧窮の状態を続けているのは，地主によるあらゆる形の農

民収奪が続いているからであると．かれは，何よりもまず，農業生産力発展の障害たる農奴制の残存物と官僚的専制政治，別言すれば，農奴主国家体制に敵意をぶつけたのである．ただ，残念なことに，かれはこの敵意を体系としてまとめて把えることができなかった．だが，ヴォロンツォフやオンとちがって，農民に土地を分与する場合に，「生産手段とともに生産者を結びつける」という原則が支配していることを究明し，改革が地主の立場をまもっていることを指摘した．すなわち，地主は優良地のほとんどを自分の掌中に集めたが，一方，農民層が分与地を受け取ったのは，飢えないために雇役という形の賦役を余儀なくされた従属的で，土地に緊縛された借地人を創り出すことと同意義だというのである．とりわけ切取地の存在については，繰り返し書いている．「今や切取地の意味がみんなにわかっている．そして，所領を購入する者それぞれが，何よりもまず切取地があるかどうか，切取地がどのように配置されていて，どれだけ農民を抑え付けているかを見るのである．」「これらの切取地――実のところしばしばなんら値のあるものではないが――は，土質によってでなく，その生産性によってでもなく，それがどれだけ農民に必要であるか，これらの切取地と引き換えに農民からどれだけしぼり出すことができるか，ということによってのみ評価されている．」(313頁)

かれが，61年の改革を批判して，農村には農奴制的諸関係が一掃されることなく残存していることを示し，その基礎が地主的土地所有であるとしたことはすでにのべたとおりである．それでは，その地主的土地所有の上に成り立つ地主経営の内容はどうか，かれがこの点に筆を進めている点にもオンやカブルーコフとのちがいを見出すことができる．

かれは次のように書いている．「<法令>が出てからすでに12年すぎた．しかし，経営のやり方は大部分昔のままで，ライ麦をつくっているが，ライ麦は値がなくて誰も買わず，ごくわずかの農民のところでかなりの収穫をあげている．燕麦はわが国では，きわめて成育がわるい．畑の耕作は，従前どおり，馬や用具をもった農民を雇ってやっている．できの悪い牧草を刈り，言ってみれば堆肥のために家畜をもち，その飼育は悪く，牛は，もし春に耕作に適しなければ，よい財産だと思われている．経営方式はかわらず，すべて<法令>以前，農奴制のもとでそうであったように，昔のままで行なわれている．昔とちがうのは，播種面積は半分以上も減少し，土地の耕作は以前よりも悪く，牧草はきれいにもせず，乾燥もせず，はびこらせているので，飼料の量も減少した．牧畜は，まさに決定的な崩壊に達した．」(123頁)　したがってここで，どうしても経営のやり方を変えることが必要だと主張するのである．

またかれは，いわゆる地主経営の「文化的な役割」を，肯定的な意味では認めず，また，地主経営が合理的な生産であるとも認めなかった．何となれば，地主の土地を耕やしているのは，緊縛された農民の労働と，農民の原始的な農具とによってであるからだとする．つまり，地主経営が，技術についても，農法についても，農民経営とはなんら異なるところがないことを指摘した．地主経営で働らく農民を描写して次のように述べている．「百姓はしぼられ，百姓は貧窮している．百姓がよくなるとしても，ばかげていて無益な，みいりのない地主経営で働らかされないように，あるいは，地主のところ

で無益にかきまぜている土地を借りることが，叶うことなら買うことができるようになるのが精々だ.」(373頁)

これを別言すれば，「地主は自分の経営からさっぱり収益を挙げていない——地主が誰でも，自分の経営の収益のないことをこぼすのももっともだ——．何とならば，百姓によってかせぎ出された収益は，管理するもの，働らきもせず，労働をも百姓をもさげすんでいる連中，食客たちの扶持に消えるからである．そして，こんな連中が，調子がいいと，人民をくるしめるクラークになるのだ.」(373頁)

地主経営に対するこのようなかれの否定的なとらえ方が，国の生産力発展の展望の中から生まれている点にわれわれは注目しなければならないであろう．収奪を専らとし，生産性の低い非合理的な経営として，地主経営に将来性のないことは，書簡の随所で述べられている．

「地主の経営は将来性がなく，一掃さるべきものである．自分の土地をもち，自分の経営をもつ百姓＝経営者が他人の経営で働らこうというのは無意味だからだ．これは，ばかばかしいことだ.」(401頁)

国の生産力発展の中で地主経営をこのように否定的なものとしたかれは，それを「すべての土地は農民に移譲さるべきものである」という農業改革のかれのプログラムに結びつけるのである．

かれのこの指摘がいかに多くの影響力をもっていたかは，ずっと後になって，1905—06年の農民運動の高揚期に，時の農相で，かつてかれの農科大学教授時代に親しくしていたエルモローフが，言葉を尽くしてかれの所論の非現実的なことを説いていることによってもわかる*.

だがかれは，国の生産力発展の中での地主的土地所有の否定的な役割り，その見とおしのなさを指摘しつつも，革命的な方途による地主的土地所有一掃を唱えることはなかった．かれが提言しているのは，土地所有権の自由な動員ということである．そうすることによって，結局のところ，すべての土地を働らく農民の手に移し，地主経営を一掃し得ると考えたのである．つまり，そこには生産力の担い手としての農民にたいするかれの限りない信頼を読みとることができる．あるいは，「革命的な方途による地主的土地所有の一掃」を唱えなかったことの故に，現在までかれの所説は顧みられること少なかったのかも知れないが，また，それ故にかれを「ナロードュキなり」と断定していたのかと思われるが，農学者にして実践家たるかれは，農業生産力向上という点を主体にして物を考えていたのである．

改革後，地主経営の数が少なくなっているという事実によって，かれは自分の所説の裏付けとしている．そして，地主経営の一つの避け得ざる終局として，かれは，銀行を通じて土地を百姓に売却することを挙げている．「結局のところ，すべてのものが百姓のものになることはいうまでもない．銀行が投げ出された土地で一体何をすることができるだろうか．必要なのは百姓に売却することだ——その他に手はない．そして，これをするのは早ければ早いほどよい．何となれば，この百姓たちの土地は，百姓たちが私

* A. C. Ермолов, Наш земельный вопрос, СПБ, 1906 は，すべての章がエンゲリガルトの所説に対する反論によって充たされている．

のところでやっているのとまったく同じ方式で経営するだろうからである.」(417頁) ここにいう方式とは，科学的な輪作方式を意味することはいうまでもない．このようにかれの所論は，すべてこれ，かれのバティッシチェヴォでの経営の実際に基ずいた科学的な農業方式による国の生産力向上という観点からでているのであるが，これが直線点に「銀行を媒介とする土地移譲論」に結びつけられるところに，唐突で，非現実的な，かれの実践的プログラムの弱点を認めないわけにはいかない．ここに私がいう「弱点」とは，例えばプリツィナ氏が「革命的な方途を唱導していない」ことの故に弱点という*のとは若干意味を異にするのは，上述のとおりである．たしかに，かれの論文が検閲を顧慮して印刷されなかった事例もある．例えば，「百姓は土地についてどう考えているか」が「オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ」誌に掲載されなかったのは，中央出版局から「もし掲載した場合出版者は逮捕されるだろう」と警告されたからだとシチェドリンが手紙でいってよこしたことがある．そして，かれ自身，検閲を計算して物を書いたということも当然あったであろう．繰返し私がいいたいのは，技術の面から具体的にとらえて国の生産力向上を誠実に追求した志向が，革命的な言葉での社会評論をしなかったことの故に過少評価されてはならないということである．

法規，法令にたいするかれの考え方も，法学史の専門的立場たら見れば決して体系的にまとまったものではなく，児戯にも等しいものであろう．それは，かれの経歴から見ただけでも歴然たることである．ここではただ，「法規によって農民に福祉を与える」という試案をかれが冷笑していることを述べるに止める．かれはロシヤに行なわれていた法規を，中世的，専制主義的なものとして強い敵意を示しているが，それは敵意というよりも嫌悪の気持ちであるかも知れない．

一体に，「百姓は愚かである．自分だけでやっていくことができない．もし誰もかれのことを心配してやらないならばかれは，森をみな焼いてしまい，小鳥をみな打ち殺し，魚はとりつくし，土地をだめにし，そして自分自身もまいってしまうのだ.」(342頁) そのような百姓への「配慮が，いつも知識人たちの主要な心づかいであったし，いまもそうである.」(342頁) これは何と辛辣な皮肉であろう．それらの言葉の中からは，「法規によって生産力が向上するものではない」という根強い技術論を汲みとることができる．

*　　*　　*

70年代のロシヤの論壇を賑わしていたのは，いうまでもなく，ロシヤにおける資本主義発展についての問題である．この問題の提起者たるナロードニキたちが，ロシヤにおいては資本主義の段階を避けて通ると信じ，農村共同体の中にロシヤ人民の救いがあると考えていたことは周知の通りである．エンゲリガルトは，これらナロードニキたちの農村共同体観に対して多くの反論を行なっているが，農村共同体の中には私有権の思想があまり発達していないというのに対して，「所有権の問題について言えば，1カペイ

* История русской экономической мысли. т. II. 1959. стр. 341 ここでプリツィナ氏は，「合法的出版物の中で，革命的な地主的土地所有の一掃を述べることは困難であったかも知れない」として，エンゲリガルトを擁護しているが，その立論の基礎はあくまで「革命的な方途による大土地所有一掃」にある。

カも，乾草の1本でも譲ろうとする大所有者や一人の農民もない」(80頁)と述べている，さらにかれは，ナロードニキのいう共同体精神に対して，農民が個人主義であり，利己主義であることを述べ，また，改革後の農村には資本主義的諸関係が発展していることを示したが，かれのこれらの反論が，後になってナロードニキと論争する場合のプレハーノフやレーニンによって大いに利用されたことはいまさらいうまでもないであろう．

資本主義の運命について，かれがどのように理解していたかは，バライシチェヴォでのかれの経営そのものが何よりもよくこれを物語ってくれるであろう．しかし，書簡の中でのかれの言葉からは，資本主義は一時的なものであり，ロシヤにおいては，やがて西欧とは異なる別の新らしい形態に移るというである．このようなかれの考えは，ロシヤの経済的現実の中には，巨大な資本主義的生産が成功する一つの重要な条件たるプロレタリアートが存在しないという認識から出発している．かれは，資本主義が生産手段の生産者からの分離と生産手段を奪われた階級の造成とを必要としていると説いたが，当のロシヤにおいてプロレタリアートが増大するとは考えなかったのである．<grande culture>と呼ばれる経営は，「奴僕(クネヒト)の存在する場合にのみ可能である．が，わが国では，そのような奴僕(クネヒト)がいないか，あるいはきわめて少ない．また，そんなものがいることを希まない．」(466頁)と述べて，自分の経営を捨てた土地なき農民についても，それが資本主義的大経営の恒常的な雇農となるには不充分だというのである．

ところが，事実は一体どうだったか．改革後の農村で否応なしに農民層の分解がすすんでいた．かれ自身も，1873年「オテーチエストヴェンヌィエ・ザピースキ」第2号の「労働力の高騰がわれわれの経営の中で大きな位置を占めているか？」の中で，ロシヤに奴僕(クネヒト)がいないという自身の結論をくつがえさざるを得なかった．かれは，農耕労働に支払らわれる賃金が，ロシヤにおいてはきわめて少なく，もっとも重労働についている者が身体の機能の正常な状態を維持することに必要なだけのものを受け取っておらず，どの職業にも農耕での重労働よりも低い賃金が支払らわれているようなものはない，とのべている．たとえば，家畜飼いの取分について，次のようにのべている．「年間60ルーブリの金，6クーリ（5～9プードのかます）6メーラ（約1プードのます）のライ麦，2クーリの燕麦，1.5クーリの大麦を受け取り，家畜や家禽を飼い，自分で耕やさねばならない小さな菜園をもっていて，1メルカのあまと1オシミーナ（105㎡）の馬鈴薯を植える場所がある．」「家畜飼は自分の家族のために年間11クーリ以上のライ麦が必要なので，さらに4クーリ2メルカを買い足さなければならない．それが現在の価格で34ルーブリになる．かくて60ルーブリのかれの報酬の中から，穀物を買った後にかれの手許に残るのは26ルーブリであり，その中から屋敷の年貢を26ルーブリ（以前子供がもっと少ないころには40ルーブリ払っていた）支払うのである．そこで，塩や油や衣類を買うために残るのは年間6ルーブリである．」(37頁)「かれの受け取るのはわずかであるが，それでもかれは羨しがられるだろう．もし私がかれを解雇しても，かれの後釜をねらう者がすぐにも50人はあらわれるだろう．」(38頁)

また，資本主義にたいするかれの態度の最もいい反証として，バテッシチェヴォにおけるかれの経営活動そのものを挙げなければならない．ペテルブルグを追放されて，ひ

どく荒廃した自分の所領に赴いたとき，かれが課題としたのは，そこで「合理的な」経営方式を打ち立てることであった．そのためにかれが採った方法は，自由雇傭による雇農の労働と出来高払制とであった．これは完全に資本主義的な雇傭である．その結果として，労働生産性ははなはだしく上昇した．前には16人で1日に9ソートニヤを脱穀していたのが，8人で11ソートニヤを脱穀するまでになった．脱穀量は増大し，逆に脱穀時間は短縮したので，賃金も増え，経営主としてのかれの収入も増えた．かれが荒廃していた所領を模範的経営にかえることができたのは，雇傭労働，出来高払制，機械，深耕，優良種子等々によってである．これはまさに，「農民改革後のロシヤの私有地経営全体の進化の基本的な諸特徴を縮図にして反映している」ものであり，レーニンをして，「資本主義に反対する自分の理論的抗議と，祖国の独自の道を信じたというその願望とにもかかわらず，実践においては，典型的なマンチェスター主義者として行動*した」といわしめる所以でもある．

次にかれの所論の中で大きな位置を占めているのは，大規模生産の問題である．幾多の事実資料に基ずいて，かれがつくり出した大規模生産が小農民経営にくらべて争い難い優越性をもっていることを示した．かれの大規模生産優越論を要約すると，次のようなことである．すなわち，土地面積当りの生産費が小経営よりも遙かに少ないこと，機械，器具をより有効に利用し得ること，細かい分業の複雑な協業が可能であり，したがって，農民各個のさまざまの能力を利用し得ること，である．

しかしながらかれは，農業における生産力の発展を，資本主義的なものではなくて，機械，分業，科学技術を広くとり入れたアルテリによる大規模生産にむすびつけて考えていた．かれの見解によれば，このようなアルテリ経営は，資本主義的経営にくらべて文句なく優越していた．かれは，アルテリ経営の下においてのみ，真の合理化と資本主義的経営と比べてより高い労働生産性が得られるとした．「経営は，土地が共同利用のもとにあり，共同で耕作されている時にだけ，真の進歩があり得る．」(294頁)

ところが一方，農民経営の実情はどうか．「農民が三圃制を変更して，牧草播種をする多圃制に切り換えねばならないと考えることのできるのは，事態の真情がわからぬ官僚農業技師と自由主義者たちだけである．夏に自分のために働らくことができて，飼料を別にととのえ得る農民にとって，三圃制はまったく合理的なものである．夏には地主の所領で働らかねばならないし，また，忙しい時に自分の飼料を準備することができないような切取地と高い支払いとによって強く抑えつけられている農民たちは，いかなる牧草播種をもすることができない．」(400頁) このように，農民経営の実情は，そこに合理化の可能性を見出すことができないものであり，したがってロシヤの農業の発展を不可能にしているのは，「土地が農耕者の手に渡っていない」からだとするのである．

このような農民経営を救済する方策として，年貢，買取支払い金を削減し，農民分与地を増加すべしとの提言は，ユ・エ・ヤンソン教授によって行なわれていたが，かれは発展しつつある資本主義の諸条件のもとでは，これらの方策によって農民経営を救い得

* T. II, стр. 479. このようにしてレーニンは，ナロードニキとの論争を課題とした時期には，ダニエルソンやカブールコフとならべて，資本主義にたいするエンゲリガルトの考え方にたいして余すところなく階級的，経済的評価を与えた．

るとは考えなかった.「農民に充分なだけの土地を分与すれば，生産性はいちぢるしく増大し，国家が大いに富裕化することは疑問の余地がないであろう．しかし，一言すれば，もし耕作農民の間に土地が豊富にあっても，農民がアルテリ的な経営に移行せず，各個に独りでそれぞれの圃場を経営するならば，土地なきものとも，あるいはまた，雇農ともなるであろう．もう一言述べるが，農民の財産の差異は，今よりもはなばなしいものになるであろう.」(319頁) つまりかれは，資本主義の発展しつつある現実を乗り切って，農民層が真に自立し，農民経営合理化の道を進むことのできるのは，すべての土地を耕作農民の手に移し，アルテリ経営を組織することによってのみ可能であるとするのである.「もっと悪くなることはないと信じてよい．今の経営がこれ以上悪くなるということはあり得ないからだ．反対に，アルテリの原則によって農村共同体の経営を打ち立てるなら，考えることもできないほど経営の発展があるだろう．……恐れるな！アルテリによって土地を耕す農村共同体は，もしそれが有利とあらば，牧草播種も，草刈機も，脱穀機も，とり入れるであろう.」(330頁)「すべて問題は結合にある．アルテリ経営の問題は，きわめて重要なわが国の経営問題であると私は考える．……

私には，このことについてなんらかの理論的な判断があるわけではない．8年間経営に従事し，しかも熱心にそれをやって，自分の経営においては輝やかしいといい得る結果を得たし，われわれの土地はきわめて豊かであると信ずる（私が経営を始めたときは，全く反対だったと思う）．地主と農民の経営を研究して次のような確信に達した．すなわち，わが国で第一の，もっとも重要な問題は，アルテリ経営の問題である．ロシヤの発展，強さ，力をよろこび，ロシヤを愛する人は誰でも，この方向において働かねばならない．これは私の確信であり，ここ農村にあってますます増大し，強くなっている確信である．

それのみならず，ロシヤの人間を信頼する私は，われわれロシヤ人がこの大事業を遂行し，新らしい経営方式を採用するだろうし，またそうなることを確信する．このことの中に，わが国の経済の独立性，特殊性があるのだ.」(303頁)

確信にみちてかれは，農民にこのような呼びかけをしているのである．

われわれはここで，かれの大経営優越編が70年代の時期に唱えられたことに大きな意義を認めたいと思う．つまり，支配的地主の土地所有権に与えた影響と農奴制の残存物を取り除くための地ならしとしての意味についてである．ただ，かれは単にアルテリをつくることによってすべての農民層の状態を改善し得ると唱えたのは，いかにも小児病的である．一体資本制のもとで，農村ブルジョアジーの増大，生産手段の小数者への集中，大多数の住民の零落を，アルテリをつくるだけのことによって防ぐことができたであろうか．

大規模生産の優越性を唱えつつも，当時のロシヤの農民にはまだこのような大事業にたずさわるだけの素地ができていない，とかれは考えた．まず第一にかれは，個人主義と所有権にたいする狂信とを挙げる．そして，自らアルテリ経営の実例を示すべきであると，インテリゲンッィアに呼びかけたのである.「周知のごとく，最近知識人青年たちの間に，自からの手による労働で穀物をつくるために，農耕者たらんとする志向があ

る．ある者は，一介の労働者となるためにアメリカへ行き——いうまでもなく，これはもっとも弱いものである——，またある者は，ロシヤに残って，土地に住みつき，自からの手でそれを耕やさんと試みる．

私には，これらの志向がはっきりとわかる．私はかれらと全く同感であり，これがロシヤのインテリゲンツィアの歴史的な使命であると信じている．私は確信する，暗い農耕者たちの間にこのようなインテリゲンツィアがあらわれるということは，わが祖国の偉大さ，力，強力さの保証であることを．私は確信する，何物にも打ち負かされることなき人民，わが国の力強い人民は，自分たちの中にインテリゲンツィアのもっともすぐれた粋を吸収し，とりこむだろうことを．」(270—271頁)

かれのこの呼びかけに応じて，バティツシチェヴォにつくった「農業アカデミー」に集まった知識人青年たちは，祖国の新らしい運命を担う抱負と希望に燃えて農耕労働を学んだ．

かれは，科学的な素養をもち，科学を実地に応用し，土地収獲率の増大方法を研究することのできる知識人たちが，農耕者大衆の間で働くことが必要であるとした．また，教養ある百姓，農業技師たる農耕者，医師や教師をつとめ得る農耕人などのように，農民として働くことのできる知識人活動家が輩出しなければならないと説いた．かれの人望と，自ら農村に入り，しかも輝やかしい経営上の成果に裏打ちされたこの呼びかけとは，多くの青年知識人を夢中にした．かくしてバティッシチェヴォのかれの所領は，このような若き巡礼のメッカとなるのである．そして，かれのもっとも忠実な弟子たちによって，かれの直接指導のもとに，アルテリによる農業植民村がつくられたが，いずれも2年以上は続かなかった．しかしかれは，失敗の原因を，単に，事に当った人々の心構えの問題に帰しているが，ここに，レーニンによって「現実主義者からロマン主義者にかわった」といわれる所以があると思う．かれが社会的進歩の原動力であるとする「生きた人物」は，具体的な社会の状態から隔離したものとして，扱われているのである．

4

以上私は12の書簡の中から，かれの所説をかいつまんで述べた．もとより12の書簡は体系的に書かれたものではないが，テクスト（60年版）の目次部分には編者による小見出しが付されているので，主としてそれを頼った．また，テクストに付されたバラシエフ教授の序論と前記プリッツィナ氏のとりまとめの手法を参照した．これらは，しかしながら，1897年に「われわれはいかなる遺産を拒否するか」の中でのべたレーニンのエンゲリカルト論の枠を決してはみ出していないし，はみ出そうともしていない．「60年代の遺産」の問題は経済的なものに限られて論ぜられている．

レーニンのいう「60年代の遺産」とは，次の三つの核心からなっている*．1）農奴制と，経済的，社会的，法律的分野におけるこの制度の所産のすべてにたいする熱烈な敵意であり，これは啓蒙思想家としての第一の特徴である．2）啓蒙，自治，自由，ヨーロッパ的生活形態と，一般にロシヤの全面的ヨーロッパ化との熱烈な擁護，3）人民大

* Соч. т. II. стр. 472

衆，主として農民の利益の主張と，農奴制とその残存物とを撤廃すれば，おのずから全般的福祉がもたらされるということにたいする衷心からの信念である．この三つの特徴についていえば，エンゲリガルトはほぼ完璧な「遺産」代表者の一人である．当時の社会的諸潮流を，啓蒙家，ナロードニキおよび「ロシヤの弟子たち」とするならば，主として「農村から」による社会評論活動におけるかれには，第一と第二の潮流のそれぞれが混在している（第一の特徴がはるかにすぐれた形であるが）．この混在から，「遺産」の問題が発展させられているし，上記二氏の論考の出発点ともなっている．

私はここで，プリッツィナ氏がそのエンゲリガルト論の結びに，「1912年になってレーニンは，エンゲリガルトを民主々義者と呼んでいる*」ことをとりあげているのを援用し，プリッツィナ氏とは若干別な意味で，私のエンゲリガルト論の結びにしたいと思う．すなわち，ロシヤの農法を確立せんとして果した役割は，ずっと後になってみれば，経営活動におけるマンチェスター主義者としての行動や社会経済的な視角の不明によるマイナスよりも，遙かに大きなものであったと思う．エカテリーナ二世の下で，ロシヤの農法が活発に論議された18世紀の末から，ヴィリヤムスの牧草循環播種農法を迎えるまでに，われわれはどれほど長い空白を思い知らされてきたことか．改革後の，狭少な三圃制の混在を条件づけた「切取地」の存在と，諸々の義務負担の媒体としての共同体的規制の下で，それらにたいして飽くなき批判（それは，前述のごとく，多少ならず的を外れたものもあったが）をつづけながら，輪作体系の一つの雛型をつくったエンゲリガルトによって，私はこの空白をわずかでも埋めたいのである．

---

* T. 18. стр. 202

** История русской экономической мысли, т. II. стр. 351

*** 1770年．エム・イ・アフォーニンがモスクワ大学において，ロシヤで最初の農学講座をもち，1788年，自由経済協会の活動家であったイ・イ・コモフが「農業論」の中で農耕と牧畜の結合を説いて飼料供給基地の創設を主張し，また，ア・テ・ボロートフは自由経済協会の機関紙において「圃場区分説」を述べている．また，ア・エヌ・ラジーシチェフも「わが所領の記録」に見られるごとく，地力向上のために多くの試みを行なっている．

Об А. Н. Энгельгардте

Сатоси Ямамото

Был ли А. Н. Энгельгардт народником или нет ? За последнее время этот вопрос обсуждался некоторыми исследователями в Советском Союзе. Они ведут полемику по вопросу об его принадлежности к тайному обществу„ Земля и воля" и стремятся определить характер его программы общественной реформы, принимая в расчет главные черты народничества, указанными В. И. Лениным. Но, по мнению автора этой статьи, не следует оценить его только с этой точки зрения.

До сих пор ещё не разрабатывалась даже картина развития производительных сил в России. Автор думает, что перед нами стоит задача прежде всего выработать её. Вот в чём заключается причина того, что автор принялся за исследвание деятельности Энгельгардта.

В ряде статей под заглавием„ Из деревни" он трактует о различных вопросах, а именно: об остатках крепостного права, об основе помещичьего хозяйства, о крестьянском индивидуадизме, о помещичьем землевладении, об отрезках, об интеллигентных рабочих, о крестьянском банке и т. д. Конечно, заключения, к которым он пришёл, включают много ошибок. Однако, мы должны обращать внимание на его усердие, с которым он долго старался создавать свою научно-целесообразную аграрную систему, и должны придавать большое значение тому, что он усовершенствовал образец севооборотной системы при ограниченных условиях отрезков и общин.